

かということは、メンバー自体が把握できていない。それをこれから数日かけて調査していこうというようなことがクラスター会議の中で申し合わせされたりしている状況ですので、一定の時間がかかるのはやむを得ないことかと思えます。

問題は、それを収集した時点でどういうふう調整がなされるかということですが、いずれにしても最初の段階では、やはり断片的な情報を重ね合わせていくしか、現場ではできなかったのかなと思います。それが1週間ぐらいたった時点になりますと、例えばシェルターのクラスターにおいても、どれぐらいのニーズがあるかということ、アイテムごとにある程度把握できてきました。テントとか家の修復キットとかいろいろなアイテムごとにある程度の整理がなされて、ギャップをこれからどうやって埋めるかという議論がなされています。最初の1週間、2週間の間というのは、ある程度そういう状況になっていくのかなと思いました。

それから、開発計画と防災との関係や、これからの復興支援のアイデアということですが、これは本当に難しいお話で、大変重たいご指摘だと思いました。災害で失ったものを元に戻すということと、そこからどう新しい社会づくりをしていくかということは、本来切れ目のない話なんですけれども、やっぱり緊急で入っていくと、まず「取り戻す」というところにどうしても目が行きがちになってしまうということを、今、お聞きしながら感じました。生計手段をどうやって元に戻していくのか、という中で、おそらく未来の社会づくりに向けた視点を必ず入れていくべきなんでしょうし、そういう意識を持っていかなければいけないと思います。また今後ともお知恵をいただければと思います。

山本 ありがとうございます。議論はまだ続くところですが、時間の都合により第1部はこれで終わりとさせていただきます。ご報告者のみなさん、どうもありがとうございました。

第2部 研究の情報 社会と文化

山本 第2部に移ります。まず、名古屋大学大学院教育発達科学研究科の服部美奈さんから、「現代ミナンカバウ社会におけるイスラームとアダット」についてご報告いただきます。

1. 現代ミナンカバウ社会 におけるイスラームとアダット

服部 美奈

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授

みなさん、こんにちは。私は名古屋大学の服部です。今日は「現代ミナンカバウ社会におけるイスラームとアダット」ということで、少し情報提供をさせていただきます。お話ししたい内容としましては、今日配ったレジュメがありますので、基本的にはこれに沿ってお話をしたいと思います。少し文字数が多いので、かいつまみながら説明していきます。

まずは自己紹介をさせていただいた後で、ミナンカバウの全体的な特徴と、主題であるイスラームとアダットの歴史的展開のお話をさせていただきます。その後、今、伝統的なアダットとイスラーム自体も変容しているということ、そして最終的には、スハルト政権崩壊後の動きについて、特に滞在をしていた経験、そしてこれまでかかわってきた経験も踏まえながらお話をしたいと思います。

■はじめに——自己紹介

最初に自己紹介します。私が現地に滞在していたのは、今からもう十数年前の1993年から1996年です。一番長く滞在していたのはこの時期です。スハルト体制末期のころ、ある意味ではスハルト体制の全盛期のころに、パダンバンジャンという、パダンからプキティンギの方に抜ける山の中腹、標高700メートルぐらいのところに住んでいました。オランダ時代に設

立された、インドネシアの女子のために設立された一番古いイスラーム学校について、アダットというよりはイスラーム改革運動を研究してきました。その後はなかなか長期で行けなくなり、今は回数が減ってしまっているのですが、数年に1回の間隔で、短期で現地訪問しています。ただ、今の新しい動きについてはまだ追えていない部分がありますので、その点については自分のわかる範囲でお話をしたいと思います。

■ ミナンカバウ地域の特徴

ミナンカバウ地域の特徴としては、言うまでもないことかもしれませんが、人口の大半がムスリムです。九十数%の人たちがイスラーム教徒であるということと、ミナンカバウ人であるということです。ただ、都市部のパダンとかブキティンギには華人やバタックの人が数%暮らしているとされています。ミナンカバウは現存する世界最大の母系制社会を形成しているということで、その母系制原理を基盤としたアダットと呼ばれる慣習法と、イスラーム信仰の厚さで知られています。

■ ミナンカバウ地域のなりたち

地域のなりたちとしては、タナ・ダタル、アガム、リマプル・コタという内陸高地が、もともとのアラム・ミナンカバウという、ミナンカバウ世界の中心地だといわれています。そこをダレックといいますが、ダレックを中核として今のパダンがある海岸地域の方に広がっていったということで、大きく分けると2つの世界に分かれています。

パダンは行政の中心で、官庁や商業地のあるところですが、そこに住んでいる人々のもともとの郷里はブキティンギにあたりパダンパンジャンにあたりして、パダン以外である人たちがすごく多いんですね。ふだんは会社で働いたり官公庁で働いていたりするのですが、週末になると山の方へ戻っていくという人も多いので、今回、幹線道路が分断されたという情報もあって、私の知り合いの人たちは大丈夫だったのかと思いました。ふだんから人々の移動がかなりあるということです。

■ イスラームとアダットをめぐる歴史的展開

イスラームと母系制の問題について、歴史的なことをざっと見ておきたいと思います。配布資料の「イス

ラームとアダットをめぐる歴史的展開」というところで、4世紀分のことを数行で書いていますけれども、もともとミナンカバウの王がイスラームへ改宗したのが16世紀後半だといわれています。16世紀末から17世紀後半までは、まず沿岸地域からイスラームが入って、非常にゆっくりした速度で内陸の方へ浸透していきました。ウラカンというところに立派な廟があるのですが、そもそもブルハヌディンという人がアチュで勉強して西スマトラでイスラームを広めていったときにはイスラーム神秘主義の影響が強く、1日5回の礼拝をすとか断食をすというものよりは、もう少し精神的な、神との一体性を重視するようなイスラームでした。それが宗教改革運動やパドゥリ運動が、さらに20世紀にはイスラーム改革運動が始まることによって、しだいにアダットの母系制の中の、特に財産をどうやって分けていくかという問題や、夫婦や家族の形態などについて、イスラームの教えと違う部分が論争されるようになっていったというのが大まかな歴史です。

■ イスラームとアダットの関係変化

イスラームとアダットの関係というのも、大きく3つの時期に分けることができるといわれています。今あるイスラームとアダットの関係性はもうずいぶん前、パドゥリ運動後から始まっています。パドゥリ運動終結の1837年ごろから、「アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはキタブラに基礎を置く」と言われるようになり、それ以前のアダットとイスラームがほとんど干渉し合わずにあったところから、その等位性が示される段階を経ての終着点でした。「アダットはイスラームに基礎を置き、そのイスラームはキタブラ(クルアーン)に基礎を置く」に示されるように、アダットに対するイスラームの優位な関係ができ、アダットが普遍的なイスラームによって保証される、つまりイスラームがアダットの後ろ盾に変わっていく変化が起きました。

■ 20世紀以降のミナンカバウにおけるイスラーム

その後、20世紀以降にまたイスラーム改革運動が起こっていくのですが、そのときの大きなポイントとしては、ミナンカバウの場合には改革派がかなり優位になっていたということです。ジャワの方は神秘主義の人たちや伝統派といわれる人たちが依然として一定の力を保ち続けますが、ミナンカバウ

表 イスラームとアダットをめぐる歴史的展開

16世紀後半	ミナンカバウ王のイスラームへの改宗
16世紀末から17世紀後半	海岸地帯における本格的なイスラーム化から、内陸高地部への浸透
18世紀末から	宗教改革運動としてのパドゥリ (Padri) 運動
1821年から1837年	パドゥリ戦争
20世紀から	エジプトのムハンマド・アブドゥらの影響を受けたイスラーム改革運動

の場合は改革運動がかなり浸透して、神秘主義教団の人たちが一般的に衰退していったという流れが、大まかに見てあるといえます。

■ 伝統的な母系制の特徴

ここで、伝統的な母系制の特徴をかいつまんでお話しします。出自は母方を通してたどり、最も高いレベルの母系集団はスク(氏族)といわれる集団で、その下にパユンと呼ばれるいくつかの血族集団があります。この段階の血族集団が農地などのハルタ・プサカ(共同世襲財産)を保有していきますが、その使用权、所有者が女性だということが特徴です。その使用权に売却権はなく、売ったり買ったりはできないんですけれども、使用していくのは代々女性で、母から娘へ受け継がれます。

ただし、同時に、男性の場合はママック(子供にとっての伯父またはそれと同列に位置付く人たち)が、その家族関係の中で非常に重要です。クマナカンというのがその姪や甥ですけれども、伯父さんと姪、甥との関係は、従来、親子の関係よりもかなり強いといわれてきました。今はもう核家族化していますが、それでもまだ強い関係があります。私がお世話になっていた家では、貧しい親戚を何家族もパダンの家に呼び寄せて、甥や姪をそこから学校に通わせていました。その学費もその人たちが払うということをつい最近もしていますので、核家族になったとはいっても、この血族関係はいまだかなり強いのではないかと思います。

それからよく聞くのは、「マシ・クルアルガ」という言葉です。一緒に話をしていると、「あの人もまだマシ・クルアルガ(親族関係)にある」、「この人も親族関係にある人なんだ」という言葉をしょっちゅう聞きます。かなり遠い関係であっても親族関係ネットワークとしてつながっていることが、「まだ親族関係の中にある」という言葉の中に表れているのではないかと思います。

■ 母系制の変容

さっきも少しお話しましたが、母系制はかなり変容してきて、現在は核家族が中心です。財産には母親が利用できる共同世襲財産と、父親が稼いだ財産があります。これはイスラームの教えとの調和ということで、代々の土地は母親が保持するけれども、結婚後に父親が稼いだものは自己取得財産(ハルタ・ブンチャリアン)ということで、その家族が持つ財産として使うことができるというように変化してきています。

■ イスラームとアダットの強調

少し話を飛ばします。報告資料の4ページになりますが、「イスラームとアダットの強調」について説明します。1958年にインドネシア共和国革命政府が樹立され、西スマトラは中央政府に対して反乱しました。それが挫折に終わって以来、中央政府の中でミナンカバウ人の影響力が低下していくと同時に、ミナンカバウの人たちが誇りにすべき文化的資産として、イスラームとアダットが人々の表現の中で多用されるようになってきます。それがさらについ最近の時代になると、つまり、スハルト体制後のレフォルマシ(改革)期に、地方分権化が行われて、地方のアイデンティティーが活性化しているのではないかなと思っています。

■ 州・地方条例の制定

1つ顕著に出ているのが、州や地方の条例です。地方分権化後に制定された例を挙げてみます。レジユメに書いてある通り、西スマトラ州では、「慣習法はイスラーム法を柱とし、イスラーム法は啓典を柱とする」ということで、パドゥリ運動後にできたイスラームとアダットとの関係が、この条例の中にも見られます。「ミナンカバウという土地はこれを柱にしていますよ」ということが書かれています。

それから、端的にいうと、非常にイスラーム化が進んだという感じを受けます。これらは私が現地へ行ったときの写真です。例えば、ここに写っているの

は普通学校の子供たちなんですけれども、宗教学校に通っていない子供たちでも、基本的にはイスラーム教徒の宗教実践としてイスラーム服を着用するという条例が出ています。レストランではビールを飲もうと思ってもなかなか飲めない状況で、あるとき私が頼んだときには黒いビニール袋に隠して持ってきて、すごく嫌そうに出してくれました。それもやっぱり、最近の動きの中で起こっていることです。

■ おわりに

最後に、少し感じたことを言っておきたいと思います。イスラーム化がさらに進展していくことで私が少し心配しているのは、今回の地震のこととも関係しますが、もともとのミナンカバウ世界に入っていない人たちのことです。西スマトラに住んでいるけれども、ミナンカバウの世界を共有していない人たち——特に華人とかバタックの人たち——が、さっきの旧市街にかなり住んでいます。今回のような地震被害があったときに、彼らはミナンカバウのネットワークの中できちんと機能して、情報を得ることができたのだろうかと心配になりました。

それからもう1つ、やはり同じようにムンタウエイ諸島というのも、ミナンカバウ世界とはかなり違う文化を持っています。いちおう、西スマトラ州という行政府の中にながらも、情報伝達という点でも文化の共有という点でも、ミナンカバウとはかなり違います。こういうマイノリティ・グループの人たちへの配慮が今回どうなっていたのかということが気になりました。

そしてもう1つ、イスラーム・ネットワークのことについて。支援との関係でムスリムの人たちはものすごくネットワークを持っているんですね。NGOもたくさん立ち上げていますし、特に女性がそういうNGOの中で大活躍していることを、私はずっと感じてきました。男性がどこかへ働きに行っても忙しい場合でも、女性が活発にやっているNGOと協力することが可能であれば、それはすごくいいことなのではないかなと思いました。以上で終わります。

山本 ありがとうございます。イスラーム化に関連してビールの話が出てきたので、インドネシアに行く人道支援の方たちから私がこれまで一番多く受けた質問が「インドネシアでビールは飲めますか」だったことを思い浮かべながら伺っていました。イスラーム

化が進んだためにビールが飲めなくなったというお話かと思っていたら、黒い袋に入れられてちゃんとビールが出てきたというのが興味深かったです。ビールを嫌そうに出したのは、もしかしたら大事なものだから他人にあげるのを嫌がっていたのかなと思ったりしました。

さて、続いて東北大学国際交流センターの山田直子さんから、「ジェンダーの視点からみた西スマトラ村落コミュニティ」についてご報告いただきます。

2. ジェンダーの視点からみた西スマトラ村落コミュニティ

山田直子

東北大学国際交流センター講師

東北大学の山田と申します。よろしくお願ひします。「ジェンダーの視点からみたミナンカバウ村落コミュニティ、西スマトラ村落コミュニティ」というテーマでお話しさせていただきます。2003年から2004年に私が西スマトラの一村落で行った個人史の聞き取り調査で得たデータなどをもとに、今日はお話しさせていただきます。

村落の話ですので、どの程度の方が村落に居住しているのかということですが、西スマトラ州の人口は2007年、470万人で、そのうち都市人口が29%と統計局が示しています。つまり、7割の人々が村落で生活しているということになります。そうしますと、西スマトラの村落がどういう社会かと疑問になります。これに答えることは非常に困難です。18世紀以降、研究者やミナンカバウ人自身が、このミナンカバウの社会や家族制度をととても特異なものとして強調してきた結果、ミナンカバウ社会像、鍵括弧つきのミナンカバウ社会像というものを構築してきたのではないかなと思います。

しかし、私が2003年から2004年にかけて調査を行うにあたって、どの村で調査するかという調査の前の調査、パイロットの調査をしたところ、画一的な、典型的なミナンカバウ社会というものは、実際はないんじゃないかと思うようになりました。ミナンカバウ社会に残っている古いことわざに、こういうものがあります。「異なる草むらには異なるバツタが生きており、異なる池には異なる魚がいる。異なる村に



調査地地図

は異なるアダットがある」ということで、ミナンカバウ社会の多様性もことわざの中で示されています。当然のことながら、地理的な条件や歴史経験、生業、村と外とのネットワークなどによって、村の性格というのはさまざまあると思われまます。今日の私のお話というのもまたその一事例で、「これが典型的なミナンカバウの村落社会ですよ」というふうにはいえませんので、それを前提のもとでお話を進めていきます。

■ 「伝統的」なミナンカバウ母系制の特徴

先ほど服部さんから、伝統的なミナンカバウ社会、母系制の特徴がお話しされましたので、「伝統的」なミナンカバウ母系制の特徴の話はスキップします。

■ 聞き取り調査

聞き取り調査をどういう方法でやったのかを少しお話しします。無作為にお年寄りを訪問していきまして、男性34名、女性51名、合計84名のお年寄りにお話を伺いました。1人最低2回お話を聞くように心掛けまして、確実にその情報が正しいものなのか、抜け落ちた情報を再度聞く作業のために2回訪問しました。お年寄りの年齢は60代後半から102歳までかなり幅があるんですけども、70代後半の方々がほとん

どでした。その方々は1930年代から1940年代にかけて、一番初めの結婚をされています。なぜそういうふうにかといいますと、ミナンカバウ社会は結婚・離婚を頻繁に繰り返すことで非常に有名でして、私が調査した村でも、4回の結婚・離婚を繰り返したという人がかなりの数でいました。今回この調査をした人々のほとんどが1930年代、オランダ植民地から日本植民地期に初婚を経験された方々ということです。

■ 個人史質問項目

どういう質問をしたかといいますが、今ここに出していますが、インフォーマント本人の情報だけでなく、両親、兄弟、配偶者、子供の情報もくまなく聞き取りしました。私の当時の興味は20世紀初頭の婚姻です。イスラームやアダットのどういう規範に従って人々は結婚し、離婚をして、その中からどういう人間関係や社会が見えてくるのかということに興味がありましたので、質問もムランタウ(移住)や結婚・離婚を中心にしたものを聞きました。

■ 調査地概要

調査地の概要に入ります。私が調査したのは、アガム県タンジュン・ラヤ郡ナガリ・ティゴ・コトという場所です。お手元の地図で、パダンの北にありますマニンジャウ湖という湖の西側に面した村ですけれども、人口5,200名ちょっとの規模で、西側には海拔500メートルのマニンジャウ湖があり、村の背後には海拔900メートルの帯状に広がる丘といえますか山が迫っているような地形にあります。2004年の調査時点で電話の普及率は全世帯の15%、携帯電話の電波も届いていないようかなり奥地にありました。

先ほどお話がちらっと出ましたが、「ナガリ」というのは一般的に「村」と翻訳されます。これまでの研究では、ナガリは強い自立性を持つ村落社会として解釈されてきました。ここは「ナガリ・ティゴ・コト」ということで、「3つのコトから成り立つナガリ」という意味があります。コトバル、コトティンギ、パニンジャワンという3つのコトから構成されています。私が調査して気付いたのは、これまでナガリというのは強い自立性を持つ村落社会だといわれてきましたが、実はコト自体が、この村の場合は自立性を持つ村落社会であるということでした。

■ 通婚圏とムラの境界性

その話は次の話と関連があります。次は人々の結婚です。結婚相手をどこから得ているのかというデータを見ると、84名中、数名を除いて全員が現在住んでいるそれぞれのコトの生まれで、コトで育ち、コトの中で結婚相手を得ていることがわかりました。それは現在70代、80代の老人世代のケースです。みなさん、その婚姻は本人の意思ではなく、家族間の交渉によって成立していたということです。1名例外がおりましたけれども、83名はすべて、本人の意思ではなく家族の合意のもとでの結婚でありました。インフォーマント自身だけでなく、そのインフォーマントの兄弟、特に村から出ていった兄弟たちも一度村に帰って、コトという非常に狭い範囲内の女性と結婚し、またムラントウに出掛けるという習慣があったようです。ですから、村を出る、出ないにかかわらず、婚姻はコトの範囲内で行われていたと言えます。先ほど、離婚・再婚をよく繰り返すという話をしましたが、離婚をして、新しい夫、あるいは新しい妻もまたそのコトの範囲内で得るために、2～3軒隣には前の夫が住んでいて、新しい夫とまた生活を始めるという、我々の感覚からいうと非常に不思議な空間が存在していたといえます。

非常に面白かったのは、19世紀の終わりから、この地域からマレーシアにムラントウする人が増えてくるんですけども、マレーシアへ行って、そこで生まれたこの村出身の両親の子供が、まだ一度も訪れたことのないこのコトに来て、その女性と結婚してまた戻っていたことです。ネットワークの距離的には非常に遠いところとのつながりも存在していたことがわかります。現在、そのインフォーマントの子供の世代というのは50代から60代です。その方の通婚圏を見てみますと、同じコト、同じナガリ出身の人と結婚するケースが大きく減少しています。ほかの地域、村の外の地域に移住しているミナンカバウ人と結婚していることがわかりました。

この状況から、結婚による村落内の紐帯強化は、以前ほど重要でなくなっていると考えられます。その背景にはいくつか要因が考えられます。人口が非常に急速に増えて、子供がたくさん生まれると、その子供が結婚して新居を構えるための土地が必要です。そうすると、世襲財産の土地がどんどんなくなっていく。結局、その村で抱えられる人口の数を越えてしまっているという状況が1つ考えられます。紐帯の輪

が若干弱くなったのではないかという話と関連しますが、以前はスクという種族関係の中でやっていた農作業も、今では自分のスク以外の人たちが、賃金をもらって農作業をするという傾向がたくさん見えてきます。

■ ムラントウの変容

次にムラントウ(移住)の変容を見ていきます。インフォーマントの世代には、「男性は生計を求めてよその土地に旅に出る。女性は村に残り、男性はムラントウに出掛ける」という一般的な解釈があります。インフォーマントの世代では、それと同様の様子がうかがえました。その子供の世代ではどうかといいますと、男性・女性にかかわらず、多くの村の人々が外の地域に出ていっています。ムラントウ先も、親の世代ではアチェ、マレーシア、メダンという3つの地域がほとんどでしたが、子供の世代になりますと、それが非常に多様化していることがわかります。世襲財産を相続する娘を村に残すこともありますが、子供全員がおばあさんを1人残して村を離れるというケースも非常に多くあります。そのような場合は、その子供たちの子供、孫を一時的に村に戻しておばあさんの世話をさせたり、おばあさんが子供のムラントウ先、今はプカンバル、次はジャカルタというように点々として、村には数カ月のみ滞在するという状況も存在しています。それでも必ず数カ月はいるという状況を見ますと、短期間ではあっても、やはり母親が村に存在するという事は、「世襲財産を継承して守るシンボル」としての意味を見いだしているものと思われる。

■ 空間にみる男性と女性の差異

このように外の世界の変化、あるいは近代化による影響などによって、ムラントウと婚姻の形はさまざまに変容していますが、変わらない部分も見とれます。それは、空間の中で見る男性と女性の活動の差異です。これは男性が、ラバオ、ケダイと呼ばれる社交場でお茶を飲みながら、トランプやマージャンのようなゲームをしているところですが、昼間です(写真2-1)。それも平日なんですけれども、このように男性が集まって情報交換をしたり、くつろいでいる光景をよく見ます。

一方、女性は水田の方で働いています(写真2-2)。この左側にご飯を食べているところです。右側



写真2-1



写真2-2



写真2-3

の方は女性で、バナナの皮を頭に載せています。彼女は田や畑での作業を週に3日ぐらいするんですけれども、それ以外の3日間は、毎週日曜日に開かれる市場でお菓子や食べ物を売るための準備をしています。これによって、ある程度現金収入を得られます。このように、女性は非常に忙しく働いています。

先ほどの彼女はかなりの投資をして、材料などを買って現金収入を得ているんですけれども、そういう投資ができない女性たちというのは、自分の畑に植わっているものや湖で取れた魚などを朝の小さな市場で売っています。ここはもう完全に女性の空間に

なっています(写真2-3)。その後ろ、奥にバギーが止まっているところが見えると思います。あそこにいるのが、写真の左のおじさんたち(社交場でくつろぐ男性)ですね。女性の空間と男性の空間が非常に明確に分かれる社会が、今も存在しているということです。

写真2-4は、左側は男性のレクリエーションの1つで、山の中に野生の豚を捕まえに行くところです。自慢の犬を連れて山にどんどん入っていき、半日ぐらい汗をかいて村に戻ります。右側は男性が伝統芸能の練習をしているところですね。これも週2回



写真2-4



ぐらい、みんなで集まってやっています。このように、空間を見ると女性と男性のディビジョン(区分)というものがかなり見えました。

■ まとめ

先ほども言いましたが、ムランタウの変容を見ますと、男性と女性の差異は顕著でなくなってきました。しかし、村落社会内の諸活動を見ますと、男女の活動空間に明確な差異が見られます。外の世界が変容しても、世襲財産を引き継ぐ女性というのはまだ村に残り、土地や家屋に対する責任も同時に引き継いでいると思われます。災害復興に関連して、ミナンカバウの人々は歴史的に優れた適応能力を、さまざまな時と場において見せております。今回の復興プロセスで、ミナンカバウ人の知恵やこれまでの経験をもとに、既存の人間関係であるとか、昔ながらの血縁、地縁の結び付きというものをどのように活用、あるいは復活させて取り組んでいくのかというものに非常に興味がありますので、今後も見ていきたいなと思っております。ありがとうございます。

山本 ありがとうございます。84人いる村で、83人は親が決めた相手と結婚したけれど1人だけ自分の意思を貫いて結婚相手を見つけたというのが興味深く、どんな人だったのかなと思いました。

第3部 討論

山本 引き続き第3部に入ります。第1部と第2部のご報告を通じて、2人の方にコメントをいただきます。はじめに、龍谷大学社会学部の加藤剛先生にコメントをお願いします。

1. コメント

加藤 剛 龍谷大学社会学部教授

加藤です。コメントは10分間と時間が限られていますので、ちょっと早口になるかと思えます。

まず西さんですが、今回の地震の位置付けの1つとして、パダンあるいは西スマトラのミナンカバウ社会がマレー人の「心のふるさと」というのは、ちょっと正確ではありません。1つはインドネシア語で、一体これをどういうふうに表示したのか。ネットでそういう表現があったということですが、私はこういう表現を西スマトラで調査していて一度も聞いたことがないし、マレーシアのマレー人、あるいはリアウ州のマレー人がどういうことかなと首をかしげる位置付けだと思います。

それから野際さんの話で、クラスター会議においても障害者が全然位置付けられていなかったということは、単に西スマトラでの障害者、あるいはインド